

22. 分化型甲状腺癌術後症例に対する I-131 内用療法

—54 症例の治療経験—

西山 佳宏 中野 覚 合田真由美
 余田みどり 川崎 幸子 高島 均
 田邊 正忠 (香川医大・放)

分化型甲状腺癌術後 54 症例に I-131 内用療法を施行し, retrospective に検討した。対象は 1984 年 11 月から 1991 年 4 月までの 54 例で, 男性 9 例, 女性 45 例, 平均年齢 52.6 歳, 乳頭癌 47 例, 濾胞癌 7 例である。方法は当科のプロトコールによった。他検査で転移巣を認めたのは 30 例で, そのうち 16 例に I-131 の集積を認めた。I-131 が転移巣に集積を認めた群は, 認めなかつた群よりも若年者と濾胞癌の割合が多く, サイログロブリン値は高値であった。CR 群と PR 群では年齢と組織型に差はなかったが, サイログロブリン値は PR 群が高値であった。副作用は食欲低下, 全身倦怠感, 吐気などが約半数に見られたが, 全て reversible であった。

23. 各種悪性腫瘍の肝転移例における PIHP, IV 型コラーゲン・7S の比較検討

阿多まり子 中村 誠治 赤宗 明久
 藤井 宗 木村 良子 棚田 修二
 飯尾 篤 濱本 研 (愛媛大・放)

PIHP と IV 型コラーゲン・7S のキットを用い, 基礎的検討と正常値の設定, および悪性腫瘍とその肝転移例の陽性率を比較した。基礎的検討では, 同時再現性・日差再現性・希釈試験ともに良好であった。最少検出濃度は, PIHP が 0.03 U/ml, IV 型が 2.0 ng/ml であった。Cut off 値は PIHP を 0.7 U/ml, IV 型は 6.0 ng/ml とした。悪性腫瘍とその肝転移例の比較は, PIHP は全体例と転移例ともに陽性率が高く, IV 型は転移例で陽性率が高かった。両キットの測定値の相関係数は 0.806 であった。

24. 金製剤による間質性肺炎の 1 例

—核医学的検討を中心に—

橋村 伸二 河野 良寛 新屋 晴孝
 清水 光春 竹田 芳弘 平木 祥夫
 (岡山大・放)
 水戸川剛秀 西谷 皓次 太田 善介
 (同・三内)
 中村 哲哉 粟井佐知夫 萩野敬一郎
 (国立岡山病院・放)

症例は 56 歳, 男性。慢性関節リウマチ (RA) としてシオゾール総計 265 mg 投与を受けていた。RA による関節症状が比較的安定していた時期に, 労作時呼吸困難が出現し, 次第に増強。同時に全身性皮疹も出現し, 胸部単純 X 線写真にて両肺野の特に上中肺野に粒網状影を主体とし, 粗大な線状影の混在する像が認められた。金製剤による間質性肺炎 (いわゆる gold lung) と診断された同症例に対し, ⁶⁷Ga シンチグラフィーおよび ²⁰¹Tl シンチグラフィーを施行。特に ²⁰¹Tl シンチグラフィーにおいて, 胸部レントゲン写真上の微細な経時的变化が, RI 集積の明瞭な差として示され, 本症例に対する ²⁰¹Tl シンチグラフィーの有用性が示唆された。

25. 放射線肺炎における ^{99m}Tc-DTPA 肺シンチグラフィーの有用性

有吉 功 菅 一能 中西 敬
 (山口大・放)
 宇津見博基 山田 典将 (同・放部)

^{99m}Tc-DTPA が静注後速やかに血管外間質に分布する性質を用いて, 広義の放射線肺炎症例 11 例に対して肺シンチグラフィーを試み, その有用性について検討した。^{99m}Tc-DTPA を静注, 30 分間動画像を収録後, 3 分間の静画像を得た。病変肺野, 正常肺野, 心臓での時間放射能曲線と, 各肺野と心臓の経時的な放射能比を検討したところ, 病変肺野での時間放射能曲線の初期の傾きは緩やかとなり, 肺野/心臓比の曲線のパターンは 3 型に分類した。また静画像上の視覚的評価も可能であった。

以上の結果から, ^{99m}Tc-DTPA 肺シンチグラフィーにより, 放射線肺炎の病態を短時間に評価しうる可能性が示唆された。